

I・HEAP 2021年 8月19日

## 2章 過去に対する方向付け (Orientation to the Past) 歴史意識研究に関するイングランドの調査からの省察

担当：太宰府市立太宰府西中学校 高松尚平

### 著者紹介

Arthur Chapman



所属 ロンドン大学准教授

略歴 12年間歴史科目の教師を勤める他、カンブリア大学、エッジヒル大学で勤務

多数の教育研究雑誌の編者も務める

研究テーマ

歴史的思考の発達…歴史的説明や解釈の対立に対する理解

### 主な著書

・ Cooper, H., & Chapman, A. (2009). *Constructing History 11-19*. Los Angeles London New Delhi Singapore Washington: Sage Publications.

・ Chapman, A. (Ed.). (2021). *Knowing History in Schools: Powerful knowledge and the powers of knowledge*. London, UK: UCL Press.

詳細は、<https://iris.ucl.ac.uk/iris/browse/profile?upi=AJCHA69>

### 重要語句

- ・ 遺産 (heritage)
- ・ 集合的記憶 (Collective Memory)
- ・ 方向づけ (Orientation)

### 議題

○Rüsen の歴史意識の4類型は、語られた結果を分析することには用いることができるが、Chapman が研究課題として指摘している歴史教育、学習の中におけるダイナミクスを分析するには4類型からの分析では限界があるのではないかと。Chapman の研究課題に答えていくにはどのような分析視点やモデルが必要になるのか？

### ➤ イントロダクション—歴史意識がもたらす変化— (pp.32~33)

2002年以前、Chapman 自身が16~19歳の学生の歴史科目の授業を担当

【Chapman のコースの導入 歴史を学ぶこと】

⇒知識の理解や適用、史資料の解釈と評価、歴史的過程の理解、歴史的議論、調査の実施

### 【Rüsen の歴史意識研究】

歴史の「概念」や「方法」だけでなく、「関心」「時間的指向性」に焦点を当て、「アイデンティティ」の概念の発展も射程に含める

人々が過去をどのように見ているかという問題を歴史家のみならず、一般の人々に拡張

⇒個人的・集団的な過去の理解、過去に関する理解を形成する要因、過去、現在、未来の理解

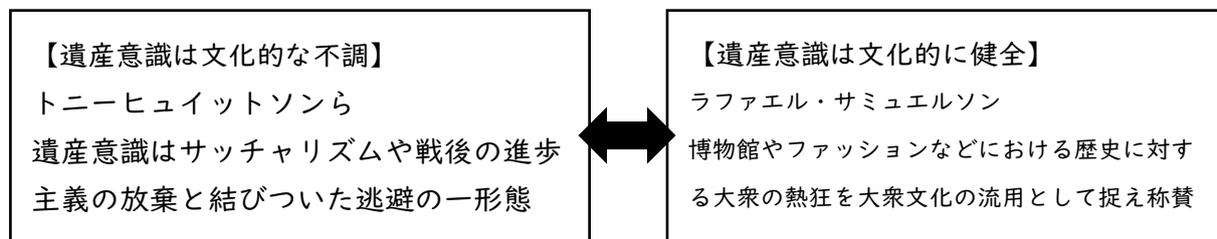
Rüsen の研究は、Chapman の歴史の指導方法や学生の歴史の学びとその評価、歴史カリキュラム、科目の枠組みについて省察を促す

### ➤ 記憶、歴史、歴史意識 (pp.34~35)

#### ○イギリスにおける歴史文化に関する議論

イギリスでは歴史教育より歴史文化（遺産）に関する研究において議論が蓄積

⇒「遺産 (heritage)」に焦点を当て、過去に関する現在の関心の高まりは文化的に健全か不調か



こうした議論は、1980年代後半に行われた歴史のNCに関する議論に影響

#### ○Rüsen の「歴史意識 (Historical consciousness)」のモデルの意義

- ・「歴史意識 (Historical consciousness)」は「遺産」「集合的記憶」に関する議論の問題を整理するのに有用
  - ・「遺産」や「集合的記憶」といった用語は、過去について表現することが、遺産の継承や既存の記憶の保存の問題であり、生成的で新たな理解をもたらす意味形成の形式であるという点を捉えにくくしてしまう可能性がある
  - ・「歴史意識 (Historical consciousness)」には歴史 vs 記憶、歴史 vs 遺産という対立軸にない包括性
- ⇒過去についての意識という場を仮定し、様々な様式をモデル化し比較対比することを可能にする分析的視座、概念ツールを提供
- ・Rüsenによれば、過去に対し「分析的」「認識的」にアプローチし探究すべき対象と捉える
  - ・過去に対する方向付け (Orientation) には、様式によって「伝統的」「模範的」「批判的」「生成的」の4つに分類され、連続性や時間、変化をどのように理解するかで区別

### ➤ 歴史意識研究への関心—過去への方向付け (Orientation) — (pp.34~35)

Chapman 自身の研究関心…学生の過去への方向付け

学生が過去について表現し、それを使って「時間の中で自己を位置づけ、過去を未来へ

の制約と可能性の両方として見る」能力について明らかにしていくこと

⇒Chapman の研究履歴…歴史的解釈についての考え方の違いに触れる

歴史的に構築された過去/非歴史的に構築された過去の類似と相違の考察

### ➤ 過去に対する自己の方向付け—3つのアプローチ— (pp.35~39)

#### ①歴史科目を受講する学生の回答を対象として (2003~2004)

**対象**…Chapman が担当する上級レベル (16~19 歳) の 2 つのコース (People, Power and Protest コース・20 世紀の独裁と民主主義コース) に所属する学生

**方法**…学生たちに各コース受講後、「世界情勢」「イギリス」「時事的なニュース」についての考え方にどのように影響しているか尋ねる

**結果**…ほとんどの学生が過去に対して**模範的、批判的**な反応を示す

##### 【People, Power and Protest コースを受講した学生の反応】

イラク-歴史と現代の間に類似点や大きな共通点があるように見えて実際には怖かったし、政府が同じ過ちを繰り返しているように見えて実際にはイライラした。

##### 【20 世紀の独裁者と民主主義コースを受講した学生の反応】

アメリカや西欧諸国が、宗教団体や左翼団体などの反対意見を阻止するために、ナチス式のプロパガンダをどのように利用しているか。独裁と民主主義のコースは、体制側がどのようにイスラム教徒や貧困層、左翼などの特定のグループを犠牲者や標的にしようとしているかを示している。

⇒学生は過去を利用しているが、前者の学生は過去と現在を本質的に同一で連続したものとして扱い、後者の学生は表面的で部分的な類似性に基づいて過去を現在に読み込んでいた

#### ②歴史科目の教師を志望する大学生、大学院生を対象として (2009~2010)

##### 研究の背景

- ・Chapman は 2009~2010 年にかけて、歴史科目の教師志望学生とともに研究
- ・当該期は、学校歴史カリキュラムが政治的に偏った形で議論→2013 年にカリキュラムが改訂

**対象**…40 人の歴史科目の教師志望学生

##### 方法

- ・学生たちが「学校の歴史は何のためにあるのか」という問いについて議論し、その際に現代の議論における主要な立場も参照
- ・学生の主張をコーディングし分析 (Barton & Levstik の「自己認識」「分析」のスタンス、Rüsen の研究を参考に分析)

##### 結果

- ・政策立案者の考え方に見られる学校歴史の理論的根拠を批判するもしくは、国の政策に顕著ではない考え方を参照して、対照的な理論的根拠を提示
- ・「現在を理解するため」(サンプルの 65%) という立場が最も多く、「シティズンシップを得る」(サンプルの 22%) 「集団のアイデンティティを築く」(サンプルの 12.5%)
- ・「歴史意識の構築」と「学問的知識の構築」はそれぞれ 37.5%と 32.5%に支持される。

### ③世界各国の歴史のカリキュラム文書を対象として

**対象**…各国の歴史カリキュラム

**方法**…カリキュラム分析☞歴史の表現や過去への方向づけをどのように構築しているか検討

**結果**

【フィンランドの歴史コアカリキュラム】

歴史教育の課題…生徒が自分の生きる時代や過去の現象を批判的に扱う方法を知っている責任あるプレーヤーに導くこと

【2003年マサチューセッツ州歴史・社会科カリキュラムフレームワーク】

伝統の継承を通じてアイデンティティを構築する，特定の遺産や価値観を生徒に内挿する  
→過去への向き合い方に焦点化すると対照的な姿が浮かび上がる

【これまでのイギリスの歴史のナショナルカリキュラム】

2007年改訂版…最も明確に「学問的」なカリキュラム

2013年改訂版…2007年版のカリキュラムとは対照的に「学問的」な性質が見えず，支離滅裂  
→カリキュラム作成グループ内の緊張関係を表しているように推測できる。

#### ➤ 研究の可能性と限界 (pp.39~40)

以上の過去への方向付けに関する研究は，本格的な研究プログラムの第一歩

**限界**

①②の研究に関してはサンプルサイズ・方法論に関しては明確な限界

アンケートへの回答や議論での主張は、パフォーマンスでもあり自己表現でもある

ゆえに学生や教員志望学生に提示する課題が変われば，全く異なる回答が得られる可能性がある

③についても方法論に関して限界がある…テキストとコンテキストの問題

カリキュラム文書は政治的パフォーマンスであり，明瞭，一義的に解釈することは困難である

#### ➤ 残された研究課題 (pp.40~41)

歴史意識のモデルを用いた一連の研究の成果

歴史教育，学習を通じて過去との関係のどのような様式が可能となり，発展するのかという問いの価値を強調している

①の研究…標準的な評価では表面化しなかった学生の考え方の問題点が明らかになった

②の研究…カリキュラム文書作成者にとって魅力的な歴史理解と歴史教師志望学生にとって魅力的な歴史理解との間には潜在的な緊張関係があることが明らかになった

歴史学習の様々な側面が互いにダイナミックに作用している様相についての調査

○カリキュラムに示される過去への方向性が、歴史とは何か、何のためにあるのかという教師自身の仮定に基づいて解釈され、媒介されるとどうなるのか

○教師の意図は、生徒が教えられたことを理解する際にどのように反映されるのか

○生徒は学んでいる過去に対する自分自身の暗黙的、明示的な方向づけを用いているのか

○生徒が教えられたことを読み、再文脈化するさまざまな方法に敏感であるならば、教師はこれらの結果にどのような違いをもたらすことができるか